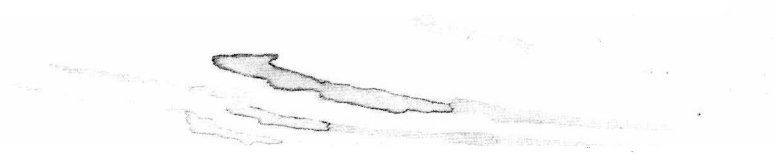


華麗なる年輪

渡辺淳一 対談



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二二―三

(郵便番号112)

光文社 文芸編集部

対談集 華麗なる年輪

一九八二年 六月二五日

初版第一刷発行

著者 渡辺淳一

発行者 大坪昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二二―三／郵便番号 112
電話 東京(〇三)九四二―二二四一(代)
振替 東京六一―一五三四七

印刷所 萩原印刷

製本所 ナショナル製本

定価 九三〇円

華麗なる年輪——目次

終着駅のなかつた道程 みちのり	岡田嘉子	7
父の魔法の眼鏡の中で	森茉莉	29
天衣無縫 むぼう に愛し愛されて	吾妻徳穂	51
想い出にノーリタン	淡谷のり子	71
妻子ある男性と恋する法	水の江滝子	93
初恋の男は意外とくだらない	ミヤコ蝶々	115

知り過ぎた毒薬の味

織田 昭子
137

「宝塚」のスターが妻になると

葦原 邦子
159

教師の道から女優の道へと

沢村 貞子
181

キヤルはオバチャマの分身

小森 和子
201

結婚しても女の心は幾千にも

三宅 艶子
221

男はやさしさに身を滅ぼす

森 光子
243

装幀
原萬千子
写真
宮地義之

柿沼
隆

華麗なる年輪

渡辺 淳一

対談

終着駅のなかつた道程^{みちのり}



岡田 嘉子●女優 演出家(おかだ よしこ)

明治35年東京で生まれる 大正8年ごろから女優の道に入り舞台協会公演「出家とその弟子」の楓役等で好演

昭和11年 井上正夫の中間演劇に参加

昭和13年 杉本良吉とともに越境してソ連へ 戦後モスクワ放送局へ入る

この間滝口新太郎と結婚 昭和47年 34年ぶりに帰国

渡辺 この対談シリーズは、仕事の面で自立なさっていて、なお恋愛のほうも充実なさっていたという……（笑い）、それでご年配の人生体験豊富な十二人の美女たちにお話をうかがおうということになりました、今回はその第一回目なんです。

岡田 まあ、それは光栄ですけど、でも私の生活ちっとも充実なんかしてませんでしたのよ。ことに仕事なんか全然中途半端で。

渡辺 でも普通の女性なら、岡田さんのご年齢ですと、何となく結婚して、年取って、孫でも抱いて日なたぼっこして満足しているという人が多いような気がします。

岡田 そういうことは私は……ダメなんです。

いまだに私はまだ自分が完成してないんです。でも孫抱いて日なたぼっここの人も、本当は満足はしてないんですよ。仕方ない、というだけで。私はあきらめられないんですね。

渡辺 不満ながらあきらめる人と、あきらめない人とは、まったく違いますよ。

岡田 それでお先っ走りなんですよ、私。行き着かないうちにほかへ行ってしまう。今考えてみると、やったことがみんな中途半端なんです。

特にこの三、四年、迷いが出たみたいで。やっぱりあせってくるんでしょね。先がもう見えてくるから(笑い)。だから、私、お若い読者の方々に参考になるようなお話ができるかどうか。

渡辺 いや、きちんとした教科書みたいな人生をおきしようというのではないのです。女の生き方としていろいろ間違っ、試行錯誤していくほうがチャーミングですよ。すんなり功成り名遂げた人よりも。

岡田 ああ、間違いのほうは、たくさん……(笑い)。

何しろ私が青春時代を送った大正のころは、「暁の野の結婚」なんていう世界にあこがれてましたから。暁の野に立って自分たちだけで日の出に愛を誓い合う、というような形が理想でしたものね。

渡辺 それに比べて今の女性たちは皆一流ホテルで素敵な男性と、周囲に祝福されてって感じで、皆型にはまって、同じような結婚式をしますね。

岡田 娘たちが、結婚とか結婚式の話ばかりするんですね。私にはそういうの、わからないんです。

いまは恋愛自体が軽くなった

渡辺 岡田さんのお父さまの職業は……。

岡田 父は新聞記者です。

渡辺 今の記者はともかく、当時の記者なら、反骨というか、自由のふんい気が強かったわけですね。

岡田 ええ、同志社の流れをくんでルソーに心酔するような人間だったし、天皇制には疑問を持つような……まア変わった親だったんですね。

そのくせ、躰しんけなんかは非常にやかましくて。

渡辺 そういう点、今はちょうど逆転してますね。躰しんけは甘くて、頭だけはカンカンに堅くて類型的になってる。

岡田 父は男の子が欲しかったのに、私が生まれたのがっかりして、用意していた嘉人という名前を嘉子に変えて、男の子みたいに私を育てましたから、それで強くなったのかもしれませんね。

渡辺 最初の男性、というのは……。

岡田 一緒に演劇の道を志していた早稲田の学生です。そういう結婚式なしの結びつきというのは当時としてはやはり風当たりは強くてね。でもまわりには九条武子さん、柳原白蓮^{びん}さん、原阿佐緒さんなんかの恋愛があって、それにあこがれとまではいいかないまでも、非常に刺激されました。

渡辺 当時のそうした新聞記事は、スキャンダルの扱ってはいまずけど、でも一種の素敵なあこがれとして見る気持ちも一部にはあったのでしょね。

岡田 ええ、私は特に学校が女子美術の洋画科で当時の一番の不良で……(笑い)、ね。でも不良と言っても今から見れば可愛いもので、学校さぼってどこへ行くかといえはローリースケートに行ったり、浅草で田谷^{たや}力三のオペラを見たり、そんな程度でしたけど。

渡辺 現実の遊びはローリースケートくらいにしても、そういう恋愛をするときの決意みたいなのは、今の子よりずっと強いつて気がしますけどね。

岡田 私はとてもおませでして、家に本がたくさんありましたから、活字には四歳くらいから親しんでました。父の蔵書の、読んじゃいけない本というのを押入れに首突っこんで夢中で読んだり(笑い)。

渡辺 今、恋愛小説というのが非常に書きにくい時代でしてね。

岡田 でもそれはあなたのお得意の分野でしょ。

渡辺 いやいや(笑い)。でも書きにくいのは、恋愛自体が非常に軽くなったものですから。

かつての明治、大正、さらに近松のころは書きよかったと思いますね。たとえば今、この時代に心中ものを書こうとしてもなかなかアリテイもたせるのは難しいし、なにやらおかしくなってます。

岡田 バカじゃないか、ってことになりかねませんね。

渡辺 恋愛は非常に簡単になりましたが、それだけ密度が低くなったというか、本当の意味の恋愛はなくなったんじゃないかという気がします。

昔は、身分格差、貧富の差、義理人情、いろんなしがらみがあって、それでずいぶん燃えたんだと思うんですね。そういう背景の中での恋愛とか青春の抒情じよじようというのは、それなりに高調してみずみずしかった(笑い)。

障害のない時代というのは、ドラマづくりが難しいです。恋愛小説もいわゆるリアリズムでは行き詰まってきて、極端に言うところ、二つの方向にわかれて、一方はセックス描写だけになってポルノになるか、もう一方はうんと抽象的なものへと分極していくような気がします。

その点、岡田さんの青春時代には、背景に厳しい条件があったゆえに燃えたという充実感があったような気がするんですが。

岡田 それは非常に思いますね。ことに杉本とソ連へ越境してまで、と思いつめたのは、そういうギリギリの限界にあったから、あれだけ燃えたんでしょね。

渡辺 この前、ある女子大生に相談されたんですが、自分は今、大変悪いことをしていて、ある中年男性とつきあっていて、その人が好きである。でも、親が反対するから、好きではないが、別の若い男と結婚しようと思うが、結婚してもその中年男と離れられないかもしれない、と言うんです。僕は好きでもない男と結婚することのほうが、妻子ある男を好きになることより、悪いことなんじゃないの、ときいてみたんです。そういう簡単な原点がわからないで、とにかく結婚という形にまず入らなきゃいけない、それ以外はすべて悪、と思ってるんですね。非常に典型的というか、常識的というか。

岡田 全体に夢が小さい、というような気はしますわね。

渡辺 杉本さんと樺太の雪の国境を越えられた。あんな大胆な発案をしたのはどちらなんですか。杉本さんと岡田さんと。

岡田 私が言い出しました。昭和十二年の暮れに、そのころ私たちは井上正夫の中間演劇に関係していましたが、井上さんは個人として新派に参加することになり私たち中間演劇の人たちは休演ということになりました。杉本は前に思想問題でつかまったこともあって、赤紙が来れば最前線送り、ってことが目に見えてましたし、じゃあ、いっそのことソ連へ行っ、芝居の勉強をしましょうよ、って私が言い出して、暮れに出発して、樺太（サハリン）の国境を越えたのが一月十三日です。私が三十四歳のときでしたかしら。

渡辺 そんな大冒険を……。普通は、男のほうが言い出しそうな計画なのに、岡田さんが